
片翼の想い～青年の物語～

静蘭 斎兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片翼の想い～青年の物語～

【Zコード】

Z0826A

【作者名】

静蘭 真兎

【あらすじ】

母が早くに事故で植物状態となってしまった、一人の青年の身の周りに起きてゆく様々な愛のかたちと、残酷な牙…彼は徐々に自分の中の自分を見付ける…

FILE 1・海の見える町

～2000年1月～青年は花を片手に持ち、寒空の下母の眠る病院へと向かつていた。

彼は慣れた道をたどいながら下に向いている。

風は海から吹き、潮の音が静かなサウンドとなつていて。

左手側には無限の海が広がつていて。

右手側にはそびえたつ崖がある。

彼は歩道を歩いているが、車道には車は滅多に走らない。

時々走るのは、排気ガスを巻き散らす大型トラックだけであつた。

青年はこの町、この道が好きだつた。

吹き抜ける風に身をまかせ舞うことも出来るし、そびえたつ崖にもたれることも出来る。

都会にはない安心感、静かさ、優しさ。

だから青年は車道にトラックが走るもの凄く怒りを覚える。

結局、都会で発生した大量のゴミはこの町に運ばれてくる。

何故、綺麗な町を汚くするのかは青年にもわからない。

大人は汚い・・・すると、後ろから走行音が聞こえる・・・青年は花を崖の方に持ちかえた。

その物体は一瞬優しいサウンドを消し、ノイズを残して去つて行く。

青年は下から目線だけを真っ直ぐに向け、物体を睨んだ。

大型トラック・・・

やはり大人は汚い・・・

青年は、目線を戻し自分の足を見ながら歩きだした。
青年はふと目を瞑る。

立ち止まる・・・風か気持いい。

青年は歩き出した。

30分位変わらぬ景色をくぐりながら歩くと、青年は目線を上げた。

「三島病院」

と看板が目に入る。青年は一息ついて病院の中に入った・・・・・。

FILE 2・三島病院と少女

「三島病院」青年は病院の中に入ると、辺りを見回した。手入れのされていない植木鉢を見た。

それには病院がどれだけ忙しいかが、まるで鏡のように忠実に「写つ」ているようだった。

『ここにちは、面会に来ました』青年は看護婦達にかるく会釈をすると面会帳簿に名前を記入した。

面会帳簿にはふりがなを記入する所があり、青年は溜め息をつくとサラサラとふりがなを記入した。

「藤咲 宇宙」

「ふじさき そら

宇宙はボールペンを叩くように置くと、母が眠る病室へと向かつた。

宇宙は慣れたように下を向きながら歩き出した。

途中には車椅子の少女、松葉杖に身をませた男性、テレビの音・・・なにもかもが普段と一緒にだった。

宇宙はふと昔を思い出す・・・母が事故を起こした時のこと・・・そして、宇宙は目を瞑った・・・しかし、彼はすぐに目を開けた。

目の前には一人の少女。

肩までかるくかかるセミロングの髪の毛。

愛嬌のある顔だった。

見舞いにでもきたのだろう。

花瓶には花が埋けてある。

花の香りか、いい香りがした。
すると、少女が話しかけてきた。

『あ、あの・・・藤咲結花さんの家族の・・・方ですよね?』

宇宙は一瞬、困惑したがすぐに返事を返した。

『ええ。

僕は息子の・・・』

宇宙は自分の名前は嫌いだ。

言いたくなかったが、いわないのはおかしい。

『息子の宇宙です。』

少女は軽くお辞儀をして、

『あ、私、藤咲結花さんの隣の病室にいる佐藤隆司の娘の、
少女は一瞬戸惑つたが、

『佐藤唯・・です。』

『唯は顔を赤らめてうつむくと、

『あの、よろしくお願ひします。』

と黙つて、足早に去つて行つた。

宇宙は溜め息をつくと、母の病室に向かい出した・・・

FILE3・母の病室と渴いた花瓶

（三島病院）

宇宙は唯と別れると、母の病室に向かった。

階段を上がり、三階の角の病室に目をむけ、歩き出す。

母の病室に向かい歩いていると、『佐藤隆司』と二つ名札が見えた。
(たしかに、お隣さんみたいだな。)

あとで顔を出してみるか。

一応、彼女とは知り合いになつたからな。

まあ、近所関係ではないが母はこれからもあの病室にいるし、あいさつしておいて損はないだらう。）

宇宙は母の病室につくと、ノンノンとノックした。

『…………』
もちろん返事はない。眠っているのだ。宇宙は微笑してドアを開けた。

『母さん、見舞いにきたよ。』

母は昔、女優をしていたのでまるでドラマのワンシーンみたいで、まるで現実味がない。

母は看護婦にちゃんと看護してもらつていて、心配はなかつた。宇宙は羽尾つてきたコートを椅子にかけ、花束を棚のうえにおいた。棚の上の花瓶をみると、花瓶の中にはなにもない。大方、看護婦が枯れてしまつた花を片付けたのだらう。空気がこもつてゐる氣がするので、窓を開けた。若干、立てつけが悪かつた。

新鮮な空気が空間を新しくした。渴いた空気が宇宙の髪を撫でた。

(気持いい)

『母さんも、そう思うだろ?』

『…………』

宇宙は母の寝顔を見ながら、表情は冷たい。

とりあえず宇宙は花瓶に花を生けようと、花を持ち部屋を後にした。
(母が眠つてからもう二年……か。ながいな……あれから、もう)

FILE3・歯の病室と渴いた花瓶（後書き）

誤字脱字が多くあります。最後までみてやつてくださいね。感想を一言でもいいので書いてくれるとやる気促進につながります。よろしくお願ひします。

FILE 4・歯車の軋む音と満天の星空

～1997年8月～

『じゃあ、宇宙。

私、仕事いくわね。

ちゃんとじい飯食べなさいよ。

『はい。

行つて、いらっしゃい……』

『宇宙……。

ごめんなさい。

『宇宙はまだ熱を持ったコーンポタージュをゆっくり飲みながら、答えた。

『何がですか？早く行かないと、遅刻しますよ？』

『え、ええ。

今日は撮影だから帰れないからね。

……じゃあ。

結花はそつこいつと玄関の扉の向こうに消えていった。宇宙は腕時計を見ると、9時を指していた。

予備校に行かなきやと思い、飲みかけのコーンポタージュを流しに捨てた。

宇宙が予備校に着いたときは11時をまわっていた。一通り授業を受けて、宇宙は本屋に寄った。

小説を買おうとしたのだが、なぜか、1つの本に目が行った。

『片翼の想い』

手にとり裏返してあらすじを見た。

(小さいころ母親を亡くした16歳の少年が、徐々に自分の苦悩と共に旅にでる。自分の中の自分を見つけに…)

「ふうん。誰だこの作家？青蘭齋兎…？知らないな…。まあ、いいや。すぐに読めそうだ。」

宇宙は電車の中で『片翼の想い』を開いた。

文章 자체は堅くなく、読みやすかつた。

結局、降りる駅までくるのに3分の1は読み終つてしまつた。

宇宙は本を閉じる頃には違和感ができていた。

まだ途中だが不思議な類似がそこにはある。何かが似ていた。

宇宙はとりあえず家に帰つた。

「ただいま…。」

家には誰もいない。

母は撮影なのであたりまえだ。宇宙の家は母子家庭だつた。空虚な空間で夕食を探つた。

宇宙は風呂に入ると布団に入り、『片翼の想い』を開いた。やはり似ていた。

なにかが似ていた。まるで自分のカケラみたいなのが見つけた気分になつた。

乾いた喉を潤すためにスポーツ飲料を飲んでいたとき…

ソレハオコッタ…

「トゥルルルルルル…」

リビングの方から無機質な機械音が響いた。次いで子機が鳴つた。

「はい、藤咲ですが…」

宇宙はこんな夜にかけてくるなんてと思っていたので、余計な電話なら切らうと思っていた。

「藤咲さんのお宅ですね？」

さつき言つた。

「あ、もしかして宇宙君でしょ？」

早くしてくれ。

「大変申し上げにくい事なんですが…。あの、先程お母様が帰宅中交通事故に遭われまして、現在三島病院の方で治療を受けております。重症なので…今から来ていただけますか？」

一瞬固まつた……。母さんが事故？

「すいません。母は今日帰れないと申しておつたのですが…なぜ。」相手はそんな事を聞いてきて驚いたのだろうか、

「はあ…。当初、予約したホテルに泊まる予定だったのですが、なぜかいきなり帰りますと言い出されました…とにかく。三島病院でお待ちしております。」

電話を切ると、宇宙は身支度を整えて、車のキーを掴み、外に飛び出した。

「ちつ…どうしてこんなことに…！」

けたたましいエンジン音とともに満天の星空の下走り出した。

宇宙にはそれがあるはずの日常が軋んで壊れる音に聞こえた。

普段の道を車でかけていくと不思議に空虚な気持ちになる。

それはナゼかはわからない。ただ、わかるのは母が危ないとこいつただけだった…

母親は好きじやない…が、普段からあるものが壊れていくのは怖かつた。無事を祈り三島病院へ……

FILE 4・歯車の軋む音と満天の星空（後書き）

誤字脱字が目立ちますが、是非、最後までおつきあいください。
まれたかたは是非メッセージを。読んだとだけも結構なんで。
みになります。

励 読

エーテル・空のパノラマ機械的な医者……やがて冷めた青年（記書き）

とつあえず読んでくれたらうれしこです！『読んだ』とでもいいからメッセージを御願いします！

FILE・母の「H」と機械的な医者……そして冷めた青年

『片翼の想い』で主人公の母親は植物人間になる結果となつた。

宇宙は三島病院の駐車場に車を停めて急いで駆け込んだ。

彼の美しい髪の毛の毛先には汗が玉をつくつていた。

『藤咲です！…あの…母は！？

あー…ええと、藤咲結花は？』

看護婦は宇宙の顔を見上げて、顔を少し赤らめ慌てた。

それほど宇宙の顔は綺麗だつた。

彼女はしばらく宇宙のことが好きになるのだが、そんなことは知らない。

『あ、現在は集中治療室で……』

宇宙はもうそこにいなかつた。

スニーカーと床の摩擦音が規則的に鳴つた。途中別の看護婦が、

『廊下は走らないで下さい！…今いつたい何時だ思いなんですか！？』

『宇宙は、
すいません！…』

そして集中治療室のドアを開けて駆け込むと医者達はつむいていた。

綺麗な女優、そして母は綺麗に眠つていた。

『母さん…？』

医者は隣に立ち、静かにかつ事務的に述べた。

『事故を起こしたとき頭を強く打ったみたいですね。病院に着いたときにはもう…懸命な治療は続けましたが、見込みがありません。』

医者はワザと機械のような声を出しているみたいだった。

疲れているのか、はたまたこれが地声なのか…だとしたら彼は抑揚のない声のような人生を送ってきたのだろうか。

医者というレールをただなぞりながら生きる。

それは一番つまらない生き方のよつたな気がするが、今の時代一番多い人種なのだ。

『そうですか…。』

宇宙はしばらく母親の顔を眺めあと…

『それでは入院という形で母をお願いできますか?』

『え…??.』

医者は驚いたのだろうか。

医者が宇宙の顔を見ると不思議と冷めた田で母親を見下ろしていたのだ。医者は機械的な咳払いをし、

『かしこまりました…それでは後日、事務手続きをいたしますので。

』
『わかりました。』

宇宙は部屋から出ようとしたとき、

『宇宙…………！わかつてね…これが母さんの…』

ハツとして後ろを見ると母は涙を流していた。

そして、ゆっくりと

『「めんなさい。宇宙……』

頭に聴こえた、、気がした。宇宙は前を見て帰路についた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0826a/>

片翼の想い～青年の物語～

2010年10月21日22時24分発行